

持続可能な食料生産・消費のための官民円卓会議
第2回アジア・モンスーン作業部会議事要旨

日 時：令和4年3月24日(月)15:00～17:00

場 所：WEB開催

出席者：別添のとおり

議題：民間企業・団体からの情報提供・官民連携の提案ほか

概要

1. 新井農水審挨拶（農水省）

- 様々な会合に参加し持続可能な食料システムについて議論をしているが、日本もアジアも思いは一つであり、持続可能な食料システムのモデルを作るために、どう知見を共有するか、そのためのプラットフォームをどう築いていくか。
- 日本国のプラットフォームを作りそれを国際機関や他国のプラットフォームと結びつけ具体的な成果に繋げていくことも重要と考える。今日皆様から頂いた提案も含め、どのようにプラットフォームを組み合わせしていくか考えていきたい。

2. 議題

（1）民間企業・団体からの情報提供

メンバー企業・団体および希望のあったオブザーバー参加企業から、それぞれの東南アジアでの活動内容と課題、それを踏まえた官民連携のアイデアについて説明。（資料1～6）

（2）報告事項

農水省から、ベトナムにおける農産物・食品の規格認証制度の活用促進について説明。（資料7）

（3）意見交換

（1）および（2）を踏まえ、官民連携の方向性について意見交換を実施。主な発言は以下のとおり。

（農水省）

- 今後のアセアンへのアプローチの際には、どのようなテーマで、どのような国を対象に取り組むかを整理することは有益と考える。ASEAN+3のプロジェクトとして取組を実施するにはテーマに2カ国以上の賛同が必要。

- 本日の各メンバー発表を踏まえれば、大まかであるが、例えば以下が考えられる。
 - ①タイが推進している BCG (bio, circular, green) モデルをタイ、フィリピン、インドネシアなどで推進
 - ②タイで実施しているスマート農業の各国への拡大
 - ③コールドチェーンについての分析として ERIA などとも連携した流通、コールドチェーン、食品ロス対応など
 - ④キャパシティビルディングも含めた持続可能な調達への対応
- いますぐ動き出せるものを、もう少し時間がかかるものがあると思うが、来年度に動けそうなものがあれば、ASEAN+3 で提案していけるのではないかな。
- また、全てのプロジェクトを通じて、IDACA のネットワークを活用することで、農協組織との連携や人材育成に対応、また政府は ASEAN+3 での働きかけや各国と二国間の農業協力対話の枠組みを使ってプロジェクトを推進することができるのではないかな。

(各メンバー企業・団体、オブザーバー)

- 今日の発表内容を全部カバーするのは難しいが、本日の各意見・アイデアを整理するのが次のステップ。その際に、サプライチェーンの川上から川下までを国をまたいだ整理をするのが重要。
- 今後の課題として、現地国の人々のメリットが見える化することが必要。東南アジア各国の農家は小規模な農家が多い中、スマート農業の導入には資金が必要であり、どのように取り組んでいくのか考えていく必要。
- まずは取組方針の整理が重要。まだ、我々に何ができるのかの具体的なイメージが湧かないので、個別に協議しながら、短期的～中期的な方針を定めていくことは必要。すでに実施している取組の中でコラボレーションや具体化ができると考える。
- 一方で資金面が課題であり、多くのプロジェクトの構想の中で、事業計画の優先順位をしていく必要がある。どのような分野やプロジェクトで貢献できるか皆さんと考えていきたい。
- 一定の方向性を整理して議論していくことが重要。その際、メンバーそれぞれの強み、役割分担を考える必要。アセアンの大半の農家は小規模、家族経営であり、持続可能な農業を点から面へ普及させていくにはその視点が重要。日本の技術をそのまま導入することは難しいこともあり、アセアン各国の農村地域の実情

に応じて、柔軟に対応していくことも必要。

- どうやってパズルを組むか考えてプロジェクトを進めるためには月一回の意見交換だけでなく、メンバーでのより具体的な意見交換の場を設けていく必要。
- 全ての参加者で方向性を合わせていくことは難しいと思うが、複数の参加者などで一定の方向性を定めていくことが重要。
- アカデミアの役割について指摘があったが、各国に拠点を持っており、59の大学とのネットワークのマッチングを実施している。食品ロスについても、熱帯地域では3割がロスされており重要な課題であることから、関連する研修を実施。

※以上を踏まえ、次回第3回の会合では、具体的な官民連携の取組方針や枠組を議論する予定。